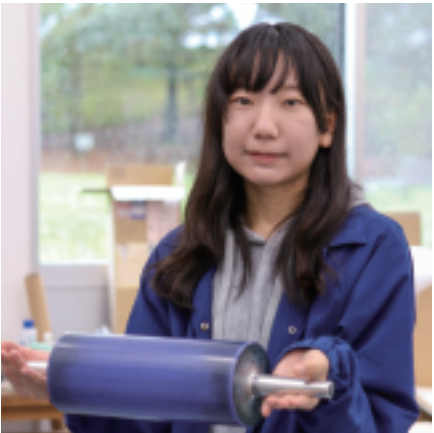


gallery118 岩本 彩花

IWAMOTO, Ayaka

大学院造形研究科修士課程1年 美術・工芸領域
和歌山県和歌山市出身、2020年3月長岡造形大学卒業



●ポートレイト撮影
月田小夏(長岡造形大学 視覚デザイン学科3年)

長岡造形大学 tel:0258-21-3311 fax:0258-21-3312 <https://www.nagaoka-id.ac.jp/> プロダクトデザイン学科／視覚デザイン学科／美術・工芸学科／建築・環境デザイン学科／大学院造形研究科

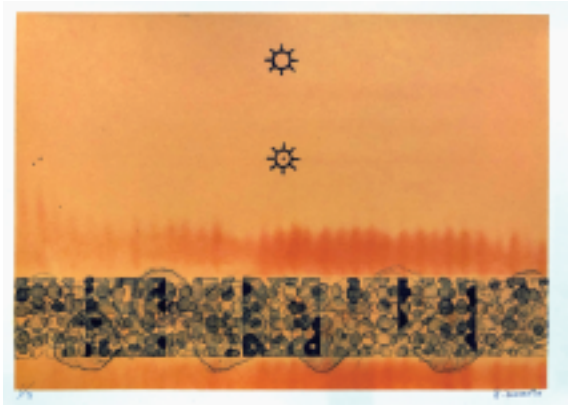
均衡をキーワードに 版画の制作と探求

修士課程に進み、「版画のメディアとしての機能の研究」とテーマを掲げて研究を行っています。版画のメディアとしての機能を考えるにあたり、私は学部時代に引き続き、「均衡」という言葉をもとに版画の制作を行っています。

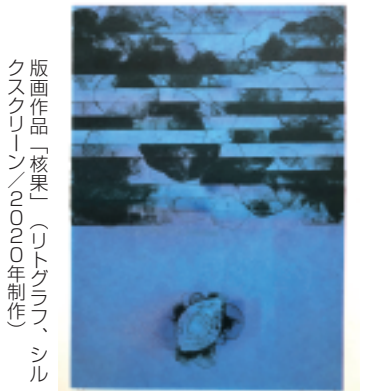
均衡とは釣り合いが取れた状態のことを指します。均衡はバランスが取れた状態であり、安定したものだと捉えられますが、私はそこに「ほんの少しの力によって崩れるかもしれないが、崩れないかもしれない」という両義性を見えています。この状態の視覚的なイメージとしては、釣り合いが取れた状態の天秤や、コップになみなみと入った水の表面張力などが挙げられます。

私たちの身の回りにおいても、うまくいっているように見えて実際はどこかに負荷のかかったギリギリの状態であるといったことは、決して珍しいものではありません。しかし、まだ何も起こっていない状態である以上ギリギリであることに気付くことは難しいように思われます。私はまだ何も起こっていない状況として均衡を描くことで自身の置かれた状況を省察し、立ち返る機会を作りたいと考えると同時に、それを人に直接的に伝えたいという思いから版画を手段として選択しています。

版画は複製が可能な複数性を持つ媒体であり、紙であるため比較的容易に人の手元に届けることができるという特性を持つメディアです。これらの版画の特性を活かしながら、ただ額に入れて壁に飾るだけではない版画のあり方と、版画であることで可能となる“人との関わり方”を探求していきたいと考えています。



版画作品「その先に何があるか」(リトグラフ、シルクスクリーン／2020年制作)



版画作品「核果」(リトグラフ、シルクスクリーン／2020年制作)

閑人閑話 見たり聴いたり関わったりと

渡辺千雅

伝え遺すことの大切さ

●最終号の校了を迎える直前、新潟日報 H 記者と T 写真記者の取材を受けました。お 2 人から「この春、長岡支社に転勤以来、取材先でマイスキップを見つけては持ち帰って読んでいたんですよ。」との嬉しいお言葉。

●20 年発行してきた経緯や読者の反応、企画編集のこだわりなど、細やかにご質問頂き、あらためて 100 号と 200 号の記念紙を開いてみました。そこには創刊号から 100 号まで、101 号から 200 号までのインデックスと、立上げの経緯などがまとめられており、私の薄れかけていた記憶もしっかり記録されていました。

●さて、2001 年 1 月創刊から 20 年目最後となる本号は、本来【240 号】の筈なのに、なぜ【239 号】なのか？そんなマニアックな疑問を持つ方は僅かだと思いますが（笑）。

●じつは創刊号～ 11 号まで、当紙は【月末発行】でした。それを【月初発行】に変更するために、2001 年 12 号を 1 回休んで調整しました。そのため、本号は【239 号】と、1 号欠け

ている訳です。

●名前も「スキップ」でスタートしたのですが、3 号目から「マイ・スキップ」という名前に、さりげなく（笑）変わっています。理由は「スキップ」の名前を商標登録した際、すでに同じ名前がネット上で登録されていたからです。

●名前だけでなく、ロゴも紙質もページ数も刷色も徐々に変わりました。時流に合わせて対応した結果です。タブロイド判 4 ページが 3 号で 6 ページに。4 号から現在の 8 ページ仕様に定着しました。

●1 色刷りから 2 色刷りになったのは 56 号から。オールカラーになったのは 133 号からで、色彩が伝える力はやはり大きいですね。

●当初は「女性が創る女性のための新聞」という触れ込みでしたが、半年経った頃から、「長岡の埋もれた歴史文化の再発見と人物紹介」をテーマに切り替えました。よって、8 号から男性が初登場します。当時の長岡市長・森民夫氏を皮切りに、12 号に秋山孝氏、14 号に入船亭扇辰氏へと続けました。

●人は誰もが一冊の本が書けるほどの豊かな

な人生があります。数千字の文章で、人生全てを語り尽くすことはできませんが、掲載紙が相手にも自分にとっても「生きた証」になることを願い、真摯に取り組んできました。紙面にご登場いただいた老若男女、数百人の人生には戦争体験者もいらっしゃいます。「二度と爆弾が降って来ない世の中に」という切実なる想いを伝え遺すことの大切さをあらためて教えられもしました。

●4・5 面の特集はまさに地域のお宝発見コーナーで楽しみな企画ではありましたが、執筆者を探すのに苦労しました。この 20 年間、民間歴史研究家の亀川純一氏はじめご寄稿頂きました皆さま、貴重な資料をご提



供いただき、ありがとうございました。

●また長期連載を頂きました秋山孝氏、佐藤秀治氏、牧野忠昌・忠慈氏、豊口協氏、森民夫氏、「造形する風」と「映論」の関係者各位に深くお礼を申し上げます。

●少数精鋭スタッフの和田竜哉・明子さん、外山文彦さん、配送の関修子さん、旧スタッフの皆さま、大変お世話になりました。

●末筆ながら、20 年間、無事に継続発行できましたのはご愛読者さまをはじめ、年間サポーター、広告スポンサーさまの変わらぬご支援の賜物です！紙面を借りて、小紙に有終の美を飾らせて頂きました関係者各位の多大なるお力添えに、重ねて感謝申し上げます。

●紙面は休刊しますが、マイスキップの屋号で仕事は続けますので、今後ともお引き回しの程、宜しくお願い申し上げます。(千雅拜)

映論言いたい放題

Film 197 セル&レンタル 12/2

『レイニーデイ・イン・ニューヨーク』

akko:この映画、ウディ・アレンの原点回帰と言われた作品ですよな。

和田:初期の傑作「アニー・ホール」を彷彿とさせると評価されていました。

三浦:ウディ・アレン作品はまだ映画を見慣れていない頃に観賞して、そのときはそれほど印象に残らずに終わってしまっって…。

akko:この映画はいかがでしたか。

三浦:これをバタナラブコメで演出されたら、私きっと登場人物のことを全員嫌いになっていたと思います。それなのに不思議とイヤな感じがしない。

akko:軽妙な演出のなせる妙ですね。

和田:アレン監督は、この主人公を自分の若い頃として描いたそうですよ。

三浦:ええ？だいたいイケメンですが…。

akko:ツイードのジャケットとか、早口で皮肉屋で理屈っぽい性格とかですかね。

和田:典型的なアレン作品のキャラクターですよな。おそらくニューヨーカーをステレオタイプに描いているんでしょう。

三浦:なるほど。この映画、出てくる人たちが微妙に情けないですよな。業界のセレブみたいな、社会的にはそれなりの人たちが、実は一皮めくると結構いろいろあって。そこが面白かったです。

和田:それもアレンらしいですよな。かつていい人たちをかつてよく描かないところとか。

akko:私はシャラメくんの母さんの秘密に驚きました。あの展開は予想外のひと言で

したね。

三浦:あれは、ストーリーに見事に味をつけていると感じました。

akko:それにしても本当にアレン監督はNYが好きですよな。あの街に対する愛情の深さを感じました。

三浦:そうですね。今まで映画で観てきたNYとは雰囲気違って見えました。

akko:もろもろの理由で最後の作品になるかもと言われていますが、もっと観たい。

和田:80代で若いキャストを使ってこれですよ。全然枯れていない。

三浦:とりあえず過去作品、いろいろ観賞してみます。

和田:傑作揃いですからね。ぜひ！



T・ジョイ長岡から今月の
オススメ映画をご紹介します！

コメディ界のヒットメーカー福田雄一が贈る
いまだかつてない「三國志」

累計発行部数2500万部の“異色”の脱獄サスペンスコミックがついに実写映画化